

おじいさんの青春日記



その9

田舎日記

おじさんの青春日記

その9

青春の感傷を胸に秘め、きょうもがんばる、
全国の孤独なおじさんに捧げる。

著者 里吉賢司
表紙イラスト 栗原俊幸

*表紙イラストの餅つき道具は「だいがら」「や」「唐臼」から「す」などと呼ばれる農具で約千年余前に中国から伝来しました。西日本一帯の山間部や農村で今も使われています。

「おじさんの青春日記」シリーズはホームページでも
ご覧いただけます。

www.urban.ne.jp/home/ojisn

聖德太子立像

聖徳太子立像

八十の齢を越えて、このころになって私はやっと送る日々に平安を覚えるようになりました。

書き残すには今をおいてない、という思いが日々募って、この書留をあなた方に残そうと思いました。

これから話すのは、わが家に伝わる聖徳太子の幼年時代を題材にした、あの塑像にまつわる私の回顧なのです。

像の高さ四十センチほど、青々と剃髪され、上の半身は裸で下の半身は赤褐色に彩色されたスカートのような裳（も）姿。幼名は厩戸皇子（うまやどののおうじ）、のちに聖徳太子と呼ばれた方が眼を閉じて、両の掌をあわせておられる素焼きのあの立像です。

鼻筋から眉にかけて、まだあどけない顔貌のなかに何ともいえない気品が漂っています。像を抱きかかえると、思いがけないほど軽やかに懐（ふところ）にころがりこみます。

昭和三十年代の半ば、夫が病を得て入退院を繰り返していた頃、廊下の椅子に身を沈めて朝に夕に「富士」という煙草を指に挟んだまま、ただじつと庭の一点を見つめていた時期がありましたね。その頃の夫にはあたりを払うような威風が漂っていて、声をかけることすらためらうほどでした。

廊下のすぐそばの仏間に太子像はいつもただ掌を合わせてたたずんでおられました。太子像から放射される神々しい意思を私は今も憶えています。それは廊下の夫を照らしているように思えました。

戦後間もなく、まだ原爆による瓦礫が町のあちこちに散在している頃、夫は機械工場を立ち上げました。アメリカの技術を手本にして、彼が開発した理容院むけの電気機械器具の製造事業です。今でいうベンチャービジネスだったのかもしれないね。

敗戦直後の混乱のなかで手に入る資材は極端に乏しく、夫は材料を求めて東奔西走する日々を送っていました。やっとの思いで手に入れたわずかな銅線や鋼（はがね）に、工場の職人たちから歓声があがりました。

私たち家族も夜遅くまで総出で家業を手伝ったものです。やがて夫の事業は順調に業績を伸ばして、全国各地からの注文に追われるようになりました。次々と工場は増築され、工場で働く人の数も増えていきました。

しかしそれはわずか十年余りの束の間のことでした。夫は五九歳で生涯を終えました。死の直前に長女は嫁いだものの、次女、三女はまだ大学生と高校生。一人きりの息子はまだ小学校を卒業したばかりの少年でした。

私は周囲に押し上げられるように、夫のあとを襲って工場の経営者になりました。葬儀の翌日から様々な思いを胸に封じ込めて、専門知識もないままに電気器具の製造業にたずさわる日々が始まりました。私が五二歳の時でした。

昼間は工場の主として昼食をとることさえ忘れるほどひたすら働いて、それ以外の時

は主婦、そして母親としての日々が続きました。

仏間の太子と正面から向かい合うことは夫の命日くらいしかない、それはめまぐるしい日々でした。

仏間で太子とやっと二人きりで語れるようになったのは、息子が成人してしばらく経ってからのことでした。

こがね虫の行列のようにルノーのタクシーが二台、石畳の坂道をあえぎながら登っていく。蛇行する坂道の左手は御影岩の大石を積んだ擁壁がそびえて、西洋の古城を見上げるようだった。坂の小径を覆つように伸びた木々のトンネルを抜けて、やがて車は小山の頂上にたどりついた。

幾棟も連なる数寄屋造りの建物の正面、車寄せに停まった。山腹を削って造営されたこの広大な和風の屋敷内にはあちこちに地山の赤土が露出していた。

見事に手入れされた旱月躑躅（さつきつじ）の植木が、丸く、こんもりと、連なる山のように植えられていた。玄關脇の小道を抜けるとその先は、隣接する山にも続く数千坪にわたる回遊式の日本庭園が広がっている。

車の停まる音と同時に和服姿の数人の女性が玄關先に飛び出してきた。

「よくいらっしゃいました。お疲れさまでございました」

ルノーのドアが観音開きに開放されると、森に洗われた清涼な空気が鼻先に飛び込んでくる。

高級料亭への招宴に顔を紅潮させた母、物珍しそつにあたりを見回す姉たち、そして退屈なばかりの小学生の私。

昭和三十年初頭（一九五〇年代中期）の頃のことである。

広島市の西、山すその古江町に政府指定の国際観光旅館であり、宴席を提供する料亭も兼ねていた大田別荘があった。昭和天皇が広島行幸の折にはその宿舎ともなった広島屈指の宿である。

春、桜が満開の頃、あるいは紅葉の頃の年一度、私たち家族はこの大田別荘での晩餐に招かれていた。

昭和三六年（一九六一年）には病に倒れる父もこの頃は活気に充ちていて、この時も玄關先で当主の大田伊織氏となにごとが大声で談笑していた。

父は大田氏の事業をなんらかの形で支援しており、その返礼のしるしとして恒例のように私たち家族が一夜の晩餐に招かれていたことを後に母から聞いた。

座敷へ通じる長い廊下の両壁にはあちこちに美術書で見たことのある筆致の絵画や、野花を挿した雅趣のある飾り器がさりげなく置かれていた。

当時六十代という年齢には不似合いな長身、ダブルのスーツがよく似合っつて英国の貴族を思わせるたたずまいの当主、大田伊織氏が回廊を先に歩いて私たちを案内する。

「この鳥の水墨画はね、宮本武蔵の描いたものなんです。武蔵、知ってますよね。剣豪の武蔵。武蔵はね、剣豪としてだけでなく、絵を描くことにもすごい才能を発揮していたんですよ」

柔和で丁寧な口調の大田氏が壁の絵を指差しながら、腰を折って小学生の私に語りかける。小磯良平の婦人像が掲げられた漆喰（しつくい）造りの洋室でのしばらくの談笑。

やがて案内された晩餐の和室に入ると、朱塗りの長机の上にとりどりの割烹が名器に盛り立て机狭しと並べられていた。漂ってくる料理の匂いと、かすかな日本酒の甘い香り。主席

の背後には二曲一双の横山大観の屏風が、部屋を圧倒するように展開していた。いま思えば、その空間すべてが絢爛たる美術であった。

戦前、大田伊織氏は中国大陸、満州国で手広く事業を展開していた。満州国の首都、新京特別市（現・長春）で宝山百貨店を経営するほか、中国大陸における燐（りん）鉱石採掘の利権を得ていた。マッチや火薬の原料にもなる燐鉱石の事業は日清戦争以来、戦火の絶えない中国大陸で大田氏に莫大な富をもたらしたに違いない。

私の家にこの頃の大田氏の隆盛をしのばせる古手紙が残っている。満州国新京特別市祝町二丁目五番地の古美術商、青井文藻堂から同市新発路・宝山百貨店大田伊織氏に宛てたものである。

満州国建国十周年を慶祝して帝國芸術院会員の絵画展覧会および販売会を行なうので列席してほしい、との案内状と売買に関する書簡である。日付は太平洋戦争さなかの日本国暦昭和十七年十一月三日。出展作品の目録が同封されている。

△日本画▽

急緩萬年	川合玉堂
愛児之図	上村松園
松籟	横山大観
布晒し	鍋木清方
鶴	小林古径
髪	橋本関雪
祝い日	前田青邨
	ほか

△油絵▽

北国の春	中村弘光
良寛上人	小杉放庵
佛印順化承天府外苑	藤田嗣治
長安街曉靄	梅原龍二郎
鏡の前	安井曾太郎
櫻	和田三造
	ほか

日本を遠く離れた満州での日本画壇を代表する画家たちによる展示会とあって、満州在住の官・財界人、軍人たちが賑わったに違いない。

大田伊織氏は広島市の出身で本川尋常小学校（現・本川小学校）の卒業生。本川尋常小学校は、廃藩置県の公布、翌年の太陽暦の正式制定と、明治政府があわただしく近代国家への試行を始めた明治六年（一八七三年）、それまでの寺子屋を廃して創立された広島市でもっとも古い小学校である。

本川小学校の同級生の一人に鷹匠町から通学する賀屋興宣氏がいた。

賀屋興宣（かや おきのり）。父親は芸州（広島）浅野藩ゆかりの国学者、母親は東京・赤坂にあった浅野藩邸生まれの、当時女性としては稀有な漢学者という家庭に育った。一家は藩主の鷹狩りの際の鷹を飼育する「鷹屋敷」を下賜され、そこに住んでいた。昭和晩期まで続いた「鷹匠町」（現・本川町）の町名の由来となった場所である。本川尋常小学校までわずか数百メートルほどの距離。

賀屋少年は四歳で山水画を描き、五歳で囲碁に親しみ、十歳に満たない齡にして新聞の論

説や小説を耽読するという神童ぶりを発揮した。

そのうち東京帝国大学法学部政治学科を経て、昭和九年（一九三四年）大蔵省主計局長に就任。以後、近衛内閣大蔵大臣、太平洋戦争開戦時の東条英機内閣大蔵大臣と、長く政府中枢にいて戦時の国家予算を取り仕切った人物である。

近衛内閣で大蔵大臣を務めた後、賀屋氏は日本軍が進駐していた中国大陸北部の開発や工業、商業を推進する北支那開発株式会社総裁を務めている。北京に居を構えた彼は中国の政・財界人をはじめ中国大陸に駐留する日本の財界人、軍人、行政官たちとの緊密な交流に明け暮れた。

太平洋戦争終結後、賀屋氏は戦犯容疑者として米軍によってただちに拘留され、極東軍事裁判においてA級戦犯として終身禁固刑を宣告される。

昭和十六年（一九四一年）十二月の日米開戦直前、当時の国の最高指導会議である大本営政府連絡会議の席で、賀屋興宣大蔵大臣と東郷茂徳外務大臣は日米開戦に猛烈な反対を唱えた。しかし彼らをもってしても、軍部を中心とした開戦への大きな流れは押し止めることが出来なかった。

戦犯となった賀屋氏は戦後、こう語っている。

「私は開戦当時の閣僚であり、また戦争の遂行期間長く閣僚であって、国民に努力と忍耐を求めた責任者のひとりです。私は戦争責任者として重大な責任を自覚しています。私は戦争の回避に努力はしました。しかし最後には開戦の決定に参加しました。私の戦争責任は決して逃れることは出来ません。しかし、連合国による裁判で戦犯とされたから、日本国家および日本国民に対して戦争責任ありと考えるものではありません。戦犯は外国人がその立場から裁いたのです。戦犯裁判は法律的にも、政治的にもいろいろと問題が多い。が、それはともかく、日本人は日本人として自主的に戦争責任を判断する必要があります。あれだけの日本の歴史に対する汚辱と国民の惨害に対して、重大な責任者がいないはずはありません。私はその一人であると自ら判断しています」

賀屋氏のようなA級戦犯は別格として、外地で戦勝国によって弁護人もいない戦犯裁判をうけ、起訴されたその当日に処刑されるなど無法きわまる扱いをうけた多くのB級、C級戦犯者とその遺族に対して、賀屋氏は獄窓のなかでも憐憫（れんびん）と自責の念を抱き続けていた。

十年間にわたる巢鴨拘留所での獄窓生活ののち昭和三三年、賀屋興宣氏は衆議院議員として中央政界の表舞台に復活する。

賀屋氏はその後、国務大臣、日本遺族会会長など数々の要職を歴任したが、戦後になって制定された生存者叙勲や褒章、公的榮譽のたぐいは一貫して受章を拒み続けた。氏には彼自身の言葉を借りれば、

「私は勲章制度反対とか、勲章蔑視とか、そんな気持ちはありません。むしろ勲章制度を尊重し、その意味からして自分は叙勲には値しない、勲章を与えられることにはあたらない人間であるという勲章尊重の筋道から、私は辞退し続けている」という思いがあった。

日本の国運破綻に大きく関わった責任と同時に、戦争によって惨憺たる辛苦を味わった日本国民と諸外国人民、戦禍に散った無数の兵士たちに対する深い贖罪（しよくざい）の念がその後の賀屋氏の政治経歴のなかに一貫してうかがえる。

昭和三八年（一九六三年）池田内閣の法務大臣に就任した賀屋氏がまっさきに取り組んだのは、太平洋戦争終結直後、自らも被告となった極東軍事裁判の詳細記録を整備し保存する作業であった。

「後世において正しい批判がなされる材料を残しておくということは、数千におよぶ戦犯受刑者の名譽のためにも、また世界の重大事件の貴重な記録としても、正義の維持と進歩のためにも必要であると考えた。正当なる（歴史の）評価がなされるために資料を

揃えたということは、人類の文明のために若干の貢献をするものと考えた

〔戦前・戦後八十年〕より〕

法理論としても、「勝者が敗者を裁く」という実体面からも疑いの多い戦犯裁判の実態を残しておきたい、という賀屋氏の強い意志がうかがえると同時に、人類の文明や歴史までも視野にいれた氏の人間としての見識とスケールを感じさせる。

後年、賀屋氏の遺族によって編纂された『賀屋興宣遺稿抄』の「回想録」のなかで賀屋氏は出身地、広島市の「本川尋常小学校」について一章を設けて小学生時代の思い出を語っている。そのなかに、親しかつた同級生として「大田」という人物の名前をあげている。

実業家、大田伊織氏の満州での事業展開に本川尋常小学校以来の同輩である賀屋興宣氏との交流が陰に陽に作用したらしいことは、生前の母に聞いたことがある。

昭和二十年（一九四五年）日本敗戦。アメリカ軍による日本占領、その後の国民主権を基本に掲げた画期的な新・日本国憲法をもとに日本は復興の道をたどり始める。

西暦六四年（推古十二年）、聖徳太子によって発議された、天皇主権、仏教礼賛を格調高くうたった日本最初の成文憲法である、「十七条の憲法」が制定されてのち、千三百余年という歴史が堆積していた。



実業家、大田伊織氏は日本敗戦によって動乱の極みに陥った満州から、家財を満載した貨物船に飛び乗って日本へ脱出した。

広島へ生還した大田氏は旧華族から買い取っていた広島市・古江在の豪壮な屋敷を改装して、政府指定の国際観光旅館・大田別荘を営む経営者として再出発したのである。その館は盛時には広島を訪れる皇族やアメリカ進駐軍要人の宿舎にあてられた。小高い山の頂上であり、見上げるような擁壁で外界と隔絶された立地は重要人物の警護にも適していたのかもしれない。

私の父は戦後まもなくからこの大田別荘の当主、大田伊織氏と親交を続けていた。十四歳も年下の父と大田氏とがどのような機縁で交流を始めたのかは今となっては知ることもできない。ただ、大田氏が賀屋氏と同じように日本の敗戦後、大陸や南方からの戦時引揚者の救済のために奔走していたことは、父の言葉としてかすかに私の記憶に残っている。

敗戦からの復興を内外に宣言する東京オリンピックを三年後に控えた年、父が死んだ。わずかな親族と仏間の聖徳太子像だけに囲まれた静かな臨終だった。

それからしばらくというものの、家族の笑い声は少なくななり、すっぱりと大きなものが抜けて無くなったような寂しさが家内に漂っていた。

庭を見つめる父の姿はそこにはなく、父が蒐集した日本画を四季折々に掛け替える風雅も途切れてしまった。

働き通しの母にとって、かつて父に伴ってよそ行きの着物姿で料亭の庭に立ったことなど、

夢のような過去であつたに違いない。

父の遺した工場は全国各地の顧客の支援と母の奮闘によってかろつじて永らえていた。

あるとき、古参の従業員が創業者である父の死を待っていたように工場を辞め、古くからの取引先と語らつて同業を興すという出来事があつた。身内と恃(たの)む者が経営の脅威に変わるといふ事件に直面した母は、

「父ちゃんがおらんけえ」「女だから」と深い嘆息をついた。

しばらく経つたのち、元従業員の起業した会社は経営が立ち行かなくなり、人を介して母の工場へ復職したいという話もたらされた時、母は決然とこれを断つた。平凡な一主婦から経営者へと変身した母の厳しい眼があつた。

学校を終えた私が工場に入り、母の手伝いをするようになって間もなく、大田別荘が破産したことが人から伝えられた。

幼い頃、父母に見守られた私があつた広い庭園を駆ける情景が頭をよぎつた。

家族にとつてあの頃のことは遠い日の思い出に過ぎず、多忙な母に過去を振り返る余裕はなかつた。

ライバル会社は次々に新製品や新分野の事業を発表するなかで、母の工場は旧態依然とした設備にすぎり、ゆるやかな衰退に身をまかせていた。経営の進路をめぐつて母と私の議論が深夜まで続くことがあつた。

あれは夕方のことでした。事務所での仕事を終えて、あわただしく夕餉(ゆうげ)の支度を始めようとしていたときのことです。

玄関に来客の気配がします。出てみると、そこに立っていたのは大柄な一人の老人でした。薄暮の光を背負うように立つその方が大田別荘の元当主、大田伊織さんとかるまで少しの時間がかかりました。

座敷にご案内して互いの無沙汰を詫(わ)びる挨拶ののち、大田さんが言葉を継がれました。

聖徳太子像にひと目お会いしたい、そしてかなうことならば、あの太子像を自分のもとに返してくれないか、とおっしゃるのです。

席を離れて台所でお茶の仕度をする間、私の心は揺れました。

たしかに聖徳太子像は大田氏のもとから我が家に渡ってきたもの。でも、重厚な桐の箱に入ったあの太子の像は、夫が大田氏に請われて買い受けたのち、自らの拠りどころのように身辺離さず置いていたものなのです。

もと満州国皇帝、溥儀(ふぎ)の別邸にあつたという我が家のピアノも、事業資金に困窮した大田氏から懇望されるまま、夫が高額で買い取ったことを私は知っていません。

黄金造りの金具があしらわれ、手塗りの黒漆(うるし)で丁寧に塗装された躯体、黒檀(こくたん)と象牙で作られた鍵盤をもつそのピアノは、日本敗戦とともに滅びた清朝最後の帝国が、今も亡霊のようになが家が家でひっそりと生き続けているようです。

夫は八歳の時に父親を亡くしました。幼い二人の弟を育てながら働く母親を助けるために、彼は十三歳になるまで親戚に預けられて育つたそうです。桐箱を作る工場へ奉公したのち、二十歳前にはみずから桐箱工場を設立したそうです。そしてその後の

事業の成功で、彼の版図は全国に広がりました。

夫は独学で身につけた教養を備えた人でしたが、学校も満足に卒業していないことを恥じて、何かの役職に就いたり、多くの人前で話すことを避けていたようでした。

美術や文芸への深い見識に加えて、旧満州での国際的なスケールの事業歴や、日本での華々しい経歴ももっておられる大田さんへのあこがれや、共感のようなものが夫にはあったのかもしれない。たまさか成功した自分の事業をもとにして大田さんを応援することで、夫は幼い頃からの夢を大田さんと共有したかったのかもしれない。仏間にたたずんで、かつては病の夫を守るようにそば近くにいられた聖徳太子像を、今になって大田氏に還すことは私には出来ませんでした。

別れを告げるように太子像に長いあいだ手を合わせておられた大田さんは、長身をかめるようにして帰っていかれました。

それ以来、大田氏とお会いすることはなく、消息すらも聞くことはありませんでした。

事業が破産し、落魄の身の上の大田氏が我が家を訪れ、すぐる思いで聖徳太子像を求めたこと、そしてそれを母が拒絶したことを私たち姉弟は知った。姉たちは母の我欲と度量の狭さをなじった。

母は多くを語ろうとはしなかった。

昭和四九年（一九七四年）、私は政治家、賀屋興宣氏が講演のために広島を訪れることを知った。

本川尋常小学校時代から満州時代を通じて大田伊織氏の盟友であり、日本保守政界で隠然たる力をもつ賀屋氏ならば、大田氏の窮状を救えるかもしれない。あるいは大田氏の消息を聞き出せるかもしれない。大田氏がまだ存命ならば、あの聖徳太子立像を私の手で家から盗み出し、大田氏のもとへ還すこともできる。二十代半ばの私は単純にそう考えた。

私は手を尽くして賀屋氏の宿舎をつきとめた。幟町の料亭旅館、「秀月園」であった。

見知らぬ者からの電話を取り次ごうとしない旅館の従業員とのやりとりのうち、賀屋興宣氏が電話口に出た。相手は八五歳になる日本政界の重鎮、私は一介の青年にすぎない。

私は非礼を詫びたのち、この次第と用件のおもむきを手短かに伝えた。自分が大田伊織氏、賀屋興宣氏と同じ本川小学校の卒業生であることも。

しわがれた声で老政治家は口を開いた。

「残念ながら今となつては私にはどうすることも出来ないのです。たしかに、あなたがおっしゃる通りに彼とは古い付き合いです。しかしね、彼からはなんの音沙汰もないし、あったとしても自分には彼をもう一度復帰させるだけの力はないのです。」

唐突な、しかも一面識もない若者からの電話に彼は誠実に、丁寧に応えてくれた。

「なおも食い下がる私に賀屋氏は言葉を続けた。

「太子の像はこれからあなたがしっかりとお守り下さい。お父上の遺品であると同時に、大田君の思いがこもったものなんです。我々はもう齢だから、祖先の遺物を守りきる力はもうないでしょう。これからはあなたのような若い人が、広い視野をもって日本の歴史や日本人の精神をしっかりと勉強して、それをまた日本の後世に伝えていくことが大事ですよ。よく電話をくれましたね。ありがとう。」

厳しい拒絶の言葉を覚悟でかけた電話の相手は、年若い私を諭すように、終始丁寧な口調で受け答えしてくれた。

電話をおいてしばらく、私は自分が夢中でしてしまったことの大きさと、相手の人物がも

たらした感動に身震いする思いだった。

芸州（広島）浅野藩ゆかりの思想家を両親とする家庭に育ち、戦時においては国策決定の最中枢に位置して太平洋戦争にかかわり、その後はA級戦犯としての長い獄窓生活。政界に復帰したのちも開戦決定にかかわった人間として、みずからの戦争体験と戦争による惨禍を公人として終始一貫して行動の原点においた人物。

賀屋興宣氏との電話でのやりとりをきっかけに、私は報道される彼の言動や人となりに強く興味を抱くようになった。

三年後の昭和五二年（一九七七年）四月、賀屋興宣氏の死去を大きく報じる新聞記事を私はくいくいるように読んだ。

私は男に生まれたかった、と小さい頃からいつも思っていました。

何をするのも女はいつも男の影のような存在。なにかを言えば「女だてらに」と叱られる。細かな気働きを忘れると「気がきかない女」と罵られる。明治に生まれた私たち女は、男たちの僕（しもべ）となって生きることが当たり前の時代だったのです。

男たちが事業や政治に熱中して、やがて世に出ていく。男の夢が大きいほど、夢はますます遠のき、やがて男は滅してしまふ。

夫の創業当時から事業経営のありさまを傍（かたわら）でつぶさに見てきた私は、夫と悲喜を共にしながらも、どこか寂しく充たされない自分を感じることがありました。

夫が亡くなって、私以外に相続する者が無いまま継承した夫の事業でしたが、無我夢中の仕事を続けるうちに、やりがいのようなものを感じることもありました。女ながら一城の主（あるじ）なのですから。

でもね、事業を大きくしてやろうなどと考えたことはありません。私にはそんな技量も学識もありませんでしたから。ただ、私たちが造る商品を持っていて下さる全国の顧客に、喜んでいただけるものをお届けしたい。子供たちに教育を受けさせるための糧（かて）はなんとしても得たい。そして、夫が心血を注いでつくり上げ、彼の死によって私に託されたものは何ひとつ欠かすことはできない。そんな思いだったのです。

夫にしる、大田さんにしる、思うまま縦横に事業をめぐらし、ひとときの栄華も味わいました。夢なかばに倒れたとはいえ、彼らに悔いはなかったのではないかと思つています。

思えばあの聖徳太子像もひよっとしたら長い長いあいだ、野心と栄光と破綻が交差する男たちのもとを転々とされて、いまはしばらく私のもとで休息されているだけなのでしょう。

戦いに疲れた孤独な男たちは神々しく合掌されるあの小さな像に、いったい何を祈ったのでしょうかね。

この書留をあなたの方の手で次の世代に伝えてくれることを私は望みます。明治、大正、昭和、平成と四つの時代、しかも私たちの国の歴史のなかで稀な、受難の時代を命をかけて生き抜いてきた私の書留なのですから。

あなたたちのこれからの平安と、時代の平和をただただ祈っています。

了

文中、一部の人名を仮名としました。

参考文献

「戦前戦後八十年」 著者 賀屋興宣 経済往来社刊
「洞の中 賀屋興宣遺稿抄」 編者 発行 賀屋正雄 和子
「聞書戦時財政金融史」 編者 大蔵省大臣官房

調査企画課

財団法人 大蔵財務協会刊
「溥儀日記」 編集 王慶祥 資料 李淑賢 学生社刊

おじさんの青春日記 その9

著者 里吉賢司

発行者 733 0034

広島市西区南観音町一七番一〇号
株式会社 里吉製作所

電話 (〇八二)二三一・三三〇九(代表)

FAX (〇八二)二九一・三三四九

E-mail ken1221@urban.ne.jp

頒価 一〇〇〇円(送料含む)

発行 二〇〇五年(平成一七年)一月一日

「おじさんの青春日記」シリーズ ホームページアドレス

<http://www.urban.ne.jp/home/ojisan/>